

## 目 次

佐々木 隆	アメリカ文化の根底：「人種のるつぼ」から「サラダボウ論」—中学校・高等学校から大学へ—	1
-------	---	---

# アメリカ文化の根底：「人種のるつぼ」から「サラダボウル論」—中学校・高等学校から大学へ—

佐々木 隆

## プロローグ

アメリカ、アメリカ文化を扱おうとすれば、人種に関する問題は避けては通れない。単にピューリタンが信仰の自由を求め、新大陸に渡り、新大陸にヨーロッパ各地からの移民が集まり、イギリスから独立し、アメリカを建国し、その後、南北戦争に代表される人種問題も、リンカーン、マーチン・ルーサー・キング・ジュニアにより黒人奴隷の解放、黒人の人権の確立、最終的にはバラク・オバマ大統領の誕生に到ったなどと羅列しても意味はないだろう。一般的にかつてはアメリカを説明する決まり文句は「アメリカは人種のるつぼ」の一言であった。それが現在はどうだろうか。ここでは中学校の「地理」、高等学校のおもに「地理B」「世界史B」の教科書での取り扱いと大学の講義での発展について考察を行う。

## 1 中学校及び高等学校の教科書の取り扱いについて

「人種のるつぼ」や「サラダボウル論」はどのような取り扱いになるだろうか。アメリカの社会を象徴するキーワードである。特に移民の国、多文化主義はどこで取り扱われるのだろうか。

『中学校学習指導要領解説 社会編』（2014年1月一部改訂）によれば、中学校社会科の目標は以下の通りである。

社会生活についての理解を図り、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。<sup>(1)</sup>

さらにその目標は以下の通りである。

広い視野に立って、社会に対する関心を高め、諸資料に基づいて多面的・多角的に考察し、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を深め、公民としての基礎的教養を培い、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。<sup>(2)</sup>

これに伴ない中学校社会科は「地理的分野」「歴史的分野」「公民的分野」の各分野に分かれている。中学校における「歴史」は日本史が必修内容として取り上げることになる。従って、世界史の内容は他の科目で取り扱われることになり、「地理」（「地理的分野」）で取り扱われることになる。「世界の様々な地域」の中で歴史的事項を含め取り扱われる。また、公民的分野でも次のような内容が盛り込まれている。

政治、経済、国際関係に関する諸事象をとらえ、これらの見方や考え方を深めるとともに、諸事象の理解をより一層深めさせるようにした。<sup>(3)</sup>

これにより人種や民族問題なども取り上げられている。

高等学校の地理歴史は「世界史 A」「世界史 B」「日本史 A」「日本史 B」「地理 A」「地理 B」に分かれている。A は 2 単位、B は 4 単位のためその扱う内容や範囲は当然異なる。高等学校では世界史は必修となり、「日本史 A」「日本史 B」「地理 A」「地理 B」のうちから 1 科目が必修修となる。

高等学校の「世界史」については拙著「イギリス文化の源流・ケルト文化の取り扱いについて—高等学校から大学へ—」(2018)においても取り上げたが、現行の学習指導要領では高等学校の「世界史」は必修科目、

「世界史 A」（2単位）か「世界史 B」（4単位）のどちらを学ぶことになっており、その単位数から見ても、「世界史 B」はより大きな枠組で時代を捉え、古代から近現代を取り扱っている。『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』（2014年1月一部改訂）によれば、「地理 B」の目標は次の通りである。

現代世界の地理的事象を系統地理的に、現代世界の諸地域を歴史的背景を踏まえて地誌的に考察し、現代世界の地理的認識を養うとともに、地理的な見方や考え方を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う。<sup>(4)</sup>

中学校の地理的分野の継続的学習が高等学校の地理において行われるため、世界史で扱わない歴史的背景は地理で扱われることになる。

## 2 中学校の「社会 地理的分野」の「人種のるつぼ」「サラダボール」の取り扱い

中学校の地理的分野のすべての教科書『中学校 地理』ではないが、その記載について調査した結果は以下の通りである。

安倍能成監修『中学社会 1 地理的分野』（日本書籍、1968年1月）

「人種のるつぼ」	記載なし
「サラダボウル（論）」	記載なし

野村正七・河野重男・佐藤竺他『新訂 中学社会 地理的分野』（教育出版、1987年1月）（1986年3月文部省検定済）

「人種のるつぼ」	記載なし
「サラダボウル（論）」	記載なし

加藤一郎・石田寛・中山正民他『中学校社会 地理』（学校図書、1993年2月）（1992年1月文部省検定済）

「人種のるつぼ」 記載なし

「サラダボウル（論）」 記載なし

海津正倫他『わたしたちの中学社会 地理的分野』（日本書籍、2006年1月）（2005年3月文部科学省検定済）

「人種のるつぼ」 記載なし

「サラダボウル（論）」 記載あり

→「百科事典で調べてみると、アメリカはもともとはイギリスの植民地で、18世紀に、東部の13州の植民地がイギリスと戦って独立し、その後、ヨーロッパを中心に世界中から移民を受け入れ、先住民を征服して開拓地を広げ、今のような大きな国をつくったということがわかった。

アメリカは50の州からなる連邦国家であるが、各州の名前を調べてみると、下の図のように、先住民のネイティブ＝アメリカンのことばに由来するもののほか、スペイン語やフランス語に由来する州もあり、かつてはスペインやフランスから移住して来た人が多かったことがわかる。

このほか、アフリカから多数の黒人が奴隷としてつれてこられたため、その子孫も多く、また最近では、中南米から移住したヒスパニック系の人やアジア系の移住者もふえてきた。そこで、人々は、各民族のちがいを認め、それぞれがもつ文化を生かしている。この動きを「サラダボウル」にたとえることもある。」(p.121)

中村和郎他『社会科 中学生の地理 世界のすがたと日本の風土』（帝

国書院、2015年1月）（2011年3月文部科学省検定済）

「人種のるつぼ」 記載なし

「サラダボウル（論）」 記載なし

五味文彦他『新しい社会 地理』（東京書籍、2015年2月）（2011年3月検定済）

「人種のるつぼ」 記載なし

「サラダボウル（論）」 記載なし

竹内裕一他『中学社会 地理 地域にまなぶ』（教育出版、2016年1月）（2015年3月検定済）

「人種のるつぼ」 記載なし

「サラダボウル（論）」 記載なし

調査した教科書の中では海津正倫他『わたしたちの中学社会 地理的分野』（2006）だけが「サラダボウル」の説明があった。記載内容として「人々は、各民族のちがいを認め、それぞれがもつ文化を生かしている」という点が重要であろう。

### 3 高等学校の「地理B」及び「世界史B」の「人種のるつぼ」「サラダボウル」の取り扱い

中学校の社会の「地理的分野」の延長線上が高等学校の「地理A」と「地理B」となる。ここでは高等学校のすべての教科書『地理B』ではないが、その記載について調査した結果は以下の通りである。

竹内常行・木内信蔵他『新版 詳説地理』（山川出版、1968年3月）

「人種のるつぼ」 記載なし

「サラダボウル（論）」 記載なし

横田忠夫他『三訂版 高等学校地理 B』（数研出版、1981年1月）（1978年3月文部省検定済）

「人種のるつぼ」 記載なし

「サラダボウル（論）」 記載なし

矢田俊文他『地理 B』（東京書籍、2003年2月）（2002年3月検定済）

「人種のるつぼ」 記載あり

→「ブラジルはグラフ②からもわかるように「人種のるつぼ」といわれる。」（p.312）

→欄外の説明「地域的に、南にいくほど白人の比率が高く、北や東にいくほど褐色人や黒人の比率が高くなる。」（p.312）

「サラダボウル（論）」 記載なし

中村和郎・谷内達他『楽しく学ぶ世界地理 B』（帝国書院、2004年1月）（2003年3月検定済）

「人種のるつぼ」 記載なし

「サラダボウル（論）」 記載なし

竹内啓一他『新地理 B』（教育出版、2007年1月）（2006年3月検定済）

「人種のるつぼ」 記載なし

「サラダボウル（論）」 記載なし

→「アメリカ合衆国は、世界各地から移住した文化の異なる人々からなる複合的社会である。しかし、彼らは「アメリカ人になる」という意志をもってやって来た人々であり、アメリカ的価値観によるまとまりをもっている。これに対してカナダ

の場合は、アメリカ合衆国以上に住民の出身母国による文化的違いが残り、「モザイク社会」ともいわれる。政府は複数の文化の存在を保障する多文化主義政策をとっている。」  
(pp.135・136)

片平博文・矢ヶ崎典隆他『新詳地理 B』(帝国書院、2013 年 1 月) (2012 年 3 月文部科学省検定済)

「人種のるつぼ」 記載なし

「サラダボウル (論)」 記載あり

→「アメリカ合衆国は、民族のサラダボウルとよばれている。そのような多民族社会が形成されてきた背景をみていこう。」  
(p.290)

\*「移民国家としてのアメリカ合衆国の発展」内。

山本正三他『新編 詳解地理 B 改訂版』(二宮書店、2017 年 1 月)  
(2016 年 3 月検定済)

「人種のるつぼ」 記載あり

→見出し「人種のるつぼからサラダボウルへ」のうち

「アメリカは、外国のさまざまな地域から移民を受け入れてきた歴史をもつだけに、住民の民族構成は複雑で、その地域差も大きい。アメリカは建国以来、イギリス系住民を基盤とした社会に、多くの住民が融合する「人種のるつぼ」(メルティングポット)を理想としてきた。しかし、実際には、異なった文化・伝統をもつ多様な集団が一つに溶けあうことは難しく、差別や偏見・対立が続いている。そのため、現在では、むしろ多様な文化や慣習をもつ人々が、それぞれの個性を活かしながら、全体として豊かで調和した社会をつくるというサラダボウルのたとえが理想とされている。異なった文化をもつ人々が相互に尊



重しあいながら共生する社会を築くことは、アメリカの大きな課題になっている。」(pp.280-281)

「サラダボウル (論)」 記載あり

→欄外の「ことばの整理」より

「人種のるつぼとサラダボウル 異なった種類の人々が一つに融合するのが「人種のるつぼ」という考え方である。一方、サラダボウルは、異なった素材がそれぞれ独自の味を発揮して、全体として一つの魅力をつくり出すという考え方である。どちらの場合も、目標とされる理想的な状態をさしたもので、現実のすがたを表現しているわけではない。」(p.281)

次に、高等学校の『世界史』の教科書では記載状況はどうなっているだろうか。ここでは高等学校のすべての教科書『地理B』ではないが、その記載について調査した結果は以下の通りである。一部、『世界史A』の教科書も調査に加えた。

三上次男・大野真弓・秀村欣二他『新版 世界史A』(中教出版、1967年2月)

三上次男・大野真弓・秀村欣二他『最新版 世界史A』(中教出版、1971年2月)

三上次男・大野真弓・秀村欣二他『世界史』(中教出版、1973年2月)  
(1972年4月文部省検定済)

三上次男・大野真弓・秀村欣二他『世界史』(中教出版、1979年2月)  
(1978年3月改訂検定済)

永井滋郎、藤井千之助他『高等学校 新世界史』(第一学習社、1983年2月)(1982年3月文部省検定済)

永井滋郎、藤井千之助他『高等学校 改訂版 新世界史』(第一学習社、1985年2月)(1984年3月文部省検定済)

- 平田嘉三他『高等学校 改訂版 世界史』(第一学習社、1990年2月)  
(1991年文部省検定)
- 藤井千之助他『高等学校 改訂版 新世界史』(第一学習社、1992年  
2月)(1991年3月改訂検定済)
- 越智武臣他『高等学校 改訂版 世界史』(第一学習社、1993年2月)  
(1992年3月改訂検定済)
- 二谷貞夫・笠原十九司・油井大三郎他『世界史 B』(一橋出版、1994  
年2月)
- 鶴見尚弘・遅塚忠躬他『高校世界史 B』(実教出版、1995年1月)(1994  
年2月文部省検定)
- 鶴見尚弘・遅塚忠躬他『高校世界史 B 新訂版』(実教出版、1999年  
1月)(1998年2月文部省検定)
- 越智武臣他『高等学校 改訂版 世界史』(第一学習社、1999年2月)  
(1998年2月文部省検定済)
- 二谷貞夫・笠原十九司・油井大三郎他『世界史 B 新訂版』(一橋出版、  
2001年1月)(1998年2月28日検定済)
- 向山宏他『高等学校 改訂版 世界史 B』(第一学習社、2007年2月)  
(2006年3月検定済)
- 西川正雄・中村平治他『世界史 B 改訂版』(三省堂、2007年3月)  
(2006年3月文部科学省検定済)
- 鶴間和幸他『高等学校 世界史 B 改訂版』(清水書院、2008年2月)  
(2007年3月文部科学省検定済)
- 川北稔・小杉泰他『新詳 世界史 B』(帝国書院、2013年1月)(2012  
年3月文部科学省検定済)
- 木畑洋一・松本宣郎他『世界史 B』(実教出版、2013年1月)(2012  
年3月検定済)
- 岸本美緒・羽田正他『新世界史』(山川出版、2014年3月)(2013年  
3月文部科学省検定済)

木村靖二・佐藤次高他『高校世界史 B』(山川出版、2014年3月)(2013年3月文部科学省検定済)

木畑洋一他『新訂版 世界史 B』(実教出版、2017年1月)(2016年3月検定済)

以上の教科書には「人種のるつぼ」「サラダボウル(論)」の記述はなかった。ちなみに、川畑勝編『ハンドブック地理の要点整理』(2013)の「アメリカ合衆国」の項目では「サラダボウル」への言及がある。

世界各国からの移民で構成され、「サラダボウル」と表現される多民族国家である。<sup>(5)</sup>

地理用語研究会編『地理用語集 A・B 共用』(2014)には「人種のるつぼ」「サラダボウル」の両方が見出し語となっている。

人種のるつぼ(メルティングポット) ①① 先住民のネイティブアメリカン・ヨーロッパ系・アフリカ系・アジア系など、多様な人種・民族が混在しているアメリカ合衆国でとなえられた民族と社会・国家との関係についての考え方。多数で主流の文化に同化するのではなく、互いの人種・民族が融和し、共通した文化の形成をめざす社会のこと。<sup>(6)</sup>

サラダボウル ③③ 「人種のるつぼ」に対して主張された。多文化主義的な考え方。多様な人種・民族集団がそれぞれの文化を尊重し、併存・協調することで豊かな文化・社会の形成をめざす。<sup>(7)</sup>

全国歴史教育研究会協議会編『世界史用語辞典』(2016)にも2つの用語は取り上げられていない。高等学校の『世界史』はアメリカ史だけを

詳しく取り上げるわけにもいかず、そのため、特に黒人の人種差別の問題はアメリカだけの問題ではないため、取り上げられている。また、地理Bにおいてもそうであるが、「人種のるつぼ」「サラダボウル（論）」が掲載されていないが、WASP (White Anglo-Saxon Protestant) を掲載することで、このあたりのものを一括して移民の諸問題としている場合も想定される。

#### 4 学生はどうやって「人種のるつぼ」「サラダボウル」を知ったか？

筆者がアメリカ文化を取り上げる大学の講義科目「英米文学史」において、学生に「人種のるつぼ」「サラダボウル」というキーワードについて尋ねると、ほとんどの学生は聞いたことがあると回答する。その内容の説明を求めると、あまりぱっとしない。「人種のるつぼ」については「るつぼ」がよくわからないようだ。「サラダボウル」については、混ざらないで独立してそれぞれが存在するといったような回答をする場合が多い。キーワードについては反応するものの、それが実際何を意味するのかを説明するのはやはり難しいようだ。「人種のるつぼ」は“the melting pot”という英語の表現の翻訳であるが、この英語の表現が提示されてはじめて、「人種のるつぼ」の意味合いが少し分かるようになるのではないかと思える。次に、教科書に載っていたかどうかを質問すると、自信をもって答えた学生はいなかった。言葉・用語は知っているが、その内容についての理解は深くはないということだ。また、学生にとっては教科書に記載されていたかどうかよりも、授業で扱われていたかどうか記憶に残る要因のようである。

では、大学1年生はどうして「人種のるつぼ」「サラダボウル（論）」について知っている者がいたのかを類推すれば以下の通りとなろう。

- (1) 中学校・高等学校の教科書に記載があり、覚えていた。

- (2) 中学校・高等学校の教科書に記載はなかったが、担当教員が用意した副教材や板書、説明等で触れたことを学生が覚えていた。
- (3) 中学校・高等学校時代の自学習や受験勉強で学んだ。
- (4) 中学校・高等学校時代に家庭教師、塾、予備校で学んだ。
- (5) 中学校・高等学校時代に TV やインターネットから情報を得た。
- (6) 他の教科で学んだ。

中学校・高等学校以外にも大学入試のための受験勉強というものが加わると、それが中学校や高等学校で習ったものなのか、塾や予備校で習ったものなのか、また自学習で参考書や問題集で知ったものなのかも本人には判別することは難しいかもしれない。

確率的に高そうなものは(1)～(3)だろう。言葉・用語だけは知っているというのは、(1)～(3)の可能が高く、理由は様々あろうが、印象に残ったため覚えているといった事例はよくある。いずれにしても理解が浅いことから、十分な理解はなされていないということは確かなようだ。

また、中学校の地理的分野の教科書で「人種のるつぼ」と「サラダボウル」の記載のないものを使用し、高等学校で地理 B を選択していない場合には全くふれないで中等教育を過ごすしてしまう可能性もある。

## 5 大学での「人種のるつぼ」「サラダボウル」の取り扱い

### (1) 大学の講義

筆者が「人種のるつぼ」「サラダボウル」に関する内容を扱うのは「英米文学史」「英書講読」の2つ授業科目である。文学を中心に取り上げる授業科目であるが、時代背景や文化背景について触れることになり、アメリカ文化を扱う際の説明のキーワードとして「人種のるつぼ」「サラダボウル」は登場し、必要に応じて解説することになる。

「英米文学史」では文字通り、イギリスとアメリカの文学、また、その背景として英米史、英米文化史に触れることになる。アメリカに限定すれば、アメリカの建国、ストウ夫人『アンクル・トムの小屋』(Harriet Beecher Stowe. *Uncle Tom's Cabin*. 1852)、1863年のリンカーン大統領による奴隷解放宣言(ゲチスバーグで演説)、1963年のワシントン大行進(キング牧師の演説「わたしには夢がある」)、アリス・ウォーカー『カラーパープル』(Alice Walker. *The Color Purple*. 1982)等については取り扱い方には差はあるにせよ、触れることになる。こうした中で「人種のるつぼ」「サラダボウル」というキーワードが使用されることになる。最近では「人種のるつぼ」の命名のもとになったイギリスの戯曲、イズレイル・ザングウィル『人種のるつぼ』(Israel Zangwill, *The Melting Pot*, 1908)も紹介し、その一節を原文で取り上げている。これには理由がある。原書が Kindle 版において無料で入手できるからである。

「英書講読」では実際の英米文学の作品を原文で読む授業科目となっているが、英語で書かれた評論で英米文学、英米文化にかかわるものを取り上げている。シェイクスピアの名台詞、ユネスコ憲章前文、聖書等がある。「人種のるつぼ」や「サラダボウル論」の原点となる英文も取り上げている。中学校・高等学校でキーワードになっている用語の原点にあたることは大学の専門科目としてはふさわしい内容であろう。

## (2) the melting pot から the salad bowl へ

「アメリカ人とは何か」を含め、専門書では「人種のるつぼ」(メルティング・ポット)及び「サラダボウル(論)」については以下のように捉えられている。

松尾式之・大西建夫編『アメリカの社会 多様性の中に統一を求めて』(1994)の丹野直「現代音楽」の中で次のように説明されている。

アメリカでは、とくに 1960 年代から現在にいたるまで、「人種  
るつぼ理論」から脱し、アメリカを構成するさまざまな人種・民族  
固有の文化を尊重しつつ全体の統合をめざす文化多元主義が主流を  
占め、「モザイク理論」や「サラダボール理論」が言われるようになっ  
た。<sup>(8)</sup>

さて、アメリカという国の成り立ちを考える時、人種について無視する  
ことはできない。中屋健一編『アメリカ入門 12 講』(1982)の中村美子  
「アメリカ人とは何か」では次のような冒頭で始まる。

「アメリカ人とは何か」を一言で定義することはむずかしい。1782  
年、アメリカで農業を営んでいたフランス生れのクレヴクールが、『ア  
メリカの一農夫からの手紙』という書簡集の中で、アメリカ人とは何  
かという問題を考察している。彼によると、アメリカ人とは「イン  
グランド人・スコットランド人・アイルランド人・フランス人・オラ  
ンダ人・ドイツ人・スウェーデン人の混合体である。それらの雑種と  
して今日のアメリカ人豊暴れる人種は生まれたのである。…アメリカ  
人とは…他国では見られないあの奇妙な混血人である。」クレヴクール  
には、アメリカ人の出身地として、ヨーロッパしか念頭に置いていな  
いという視野の狭さはあるが、アメリカ人はヘテロジニアス(多民族)  
である点についての彼の観察は正しかった。<sup>(9)</sup>

杉田米行編『アメリカを知るための 18 章』(2013)の飯島真里子「第  
14 章 アメリカへの移民—国民国家による排除と包摂」ではアメリカ人  
の定義について次のように述べている。

多様な背景を持つ人々が住むアメリカでは、国民国家としての統一

を実現するうえで「アメリカ人」を明確に定義することは重大な課題である。1868年憲法修正第14条により、先住民を除きアメリカ国内で生まれた者に対する市民権付与（出生地主義）が保証されたが、帰化権に関しては、長らく人種と民族がその付与を左右していた。たとえば、1790年帰化法では、帰化申請権は「自由な白人」に限られ、黒人、白人年季奉公人には与えられなかったが、奴隷が解放されると「アフリカ出身者及びその子孫」が帰化可能となった（1870年移民・帰化法）。<sup>(10)</sup>

先住民について日本アメリカ文学・文化研究所編『アメリカ文化ガイド』（2000）の池田智「地域」では次のように説明されている。

北米の支配権をめぐるイギリスとフランスの戦争では、英仏がそれぞれ先住民を味方につけようとした。そのためこの戦争は＜フレンチ・アンド・インディアン・ウォー＞と呼ばれる。そのときのインディアンとイギリス軍の戦いをテーマにした映画『征服されざる人々』には、イギリス軍がインディアンにたいして行った、天然痘やペスト菌の付いた毛布などをばらまく細菌戦術の様子が描かれている。続いて始まる独立戦争でも先住民の土地が戦場になった。ジョン・フォード監督の『モホークの太鼓』にはイギリス軍に協力する先住民が登場するが、アメリカは独立宣言のなかで「イギリスは先住民をそそのかした」と言っているように、独立戦争にはインディアン掃討の側面もあった。<sup>(11)</sup>

インターネット上に公開されている阿部珠理「アメリカ先住民族の呼称について」では以下のように述べている。

インディアンという呼び名は、コロンブスがアメリカ大陸をインド亜



大陸と間違えた歴史の誤謬に由来するものであるが、現在、アメリカ政府の法令においては、ネイティブ・アメリカンとアメリカ・インディアン両方の呼称を併用している。2004年に誕生した最も新しい国立のスミソニアン博物館の名称は「アメリカ・インディアン博物館」である。この他、アメリカ先住民研究の中心である、アリゾナ大学、UCLAはそれぞれ「アメリカ・インディアン学部」、「アメリカ・インディアン研究センター」を有するなど、インディアンという呼称は、ごく一般的なものとなっている。尚、本稿では、アメリカ・インディアンと同義でインディアンという呼称も用いている。現在、誰よりもアメリカ・インディアンの呼称を是としているのは、他ならぬ先住民自身である。先住民学の第一人者であるラコタ・スー族のヴァイン・デロリア・ジュニアは、歴史がアメリカ・インディアンに対して犯した大罪を忘却しないためにも、「建設的抵抗」を示す名辞として、アメリカ・インディアンの呼称を使用し続けるべきだと主張している。そもそも歴史的、語義的にも「ネイティブ・アメリカン」は、移民一世ではないアメリカ生まれのアメリカ人を意味するもので、先住民を指すものではなかった。60年代以降の汎インディアン運動の担い手であり、民族自決運動を大きく前進させたのは「アメリカ・インディアン・ムーブメント」に他ならない。<sup>(12)</sup>

上記は法律上の「アメリカ人」である。佐伯彰一編『アメリカハンドブック』（1986）の宮本倫好「人種—エスニック・アメリカ」では次のように説明されている。

アメリカの歴史はそのまま移民の歴史である。その中で主流となったのは WASP（白人のアングロ・サクソンのプロテスタント）と呼ばれるイギリス系プロテスタントの先住民たちであった。もっともアメリカでは、實際上 WASP の定義はもっと広く、ケルト系のスコットラ

ンド人、オレンジ・アイリッシュと呼ばれるプロテスタントのアイランド人、同じくケルト系のウェールズ人、主として西部へ入植したドイツ系や北欧系、あるいはオランダ系のプロテスタントは皆 WASP だ。要するに、アイランド系などカトリック教徒やユダヤ系が大量に入植する以前の先住組プロテスタントの子孫とみればよいだろう。

その WASP がアメリカの伝統的価値観、信条、風俗などを作り上げたことは間違いなく、かつては WASP 文化に同化することが「アメリカ人になる」前提条件であった。だから後発のアイランド人や南欧系のカトリック教徒、あるいは東欧系ユダヤ人、東洋人などは何世代もかけて「アメリカ化の階段」を登った。その過程で主流はからする新植民者への差別の壁は厚かった。<sup>(13)</sup>

日本アメリカ文学・文化研究所編『アメリカ文化ガイド』(2000)には「WASP」を次のように説明している。

**White Anglo-Saxon Protestant** の略称で、アングロ＝サクソン系のプロテスタントの白人を指す。19 世紀から 20 世紀に南欧や東欧からやってきた移民にとっては、彼らの生活様式を見習い、彼らのようにふるまうことが、アメリカ人として同化することであり、社会的上昇を実現する手段とみなされた。<sup>(14)</sup>

中村美子「アメリカ人とは何か」(1982)ではアメリカの多民族性について、次のように述べている。

19 世紀硬軟に始まる新移民の大量移民や、1950 年代から黒人を中心とする公民権運動の影響から、WASP を中心とする「人種るつば論」は今や通用しなくなった。少数派民族の自意識の高まりは、あえて祖国の文化・言語を捨てて、WASP に追従する従来の価値観をたえがた

たいものにした。それぞれ異なる民族が、祖国の伝統を持ち込んで自らのアイデンティティを確立したまま、アメリカ社会の中で他の民族と共存するという考え方が、より強く認めされるようになった。このように、個々の民族的・人種的要素を生かしつつ、全体の調和を保つアメリカ社会という理論は「モザイク理論」とか、「サラダ・ボール理論」(1959年、カール・デグラール『現代アメリカを形成する諸要素』よりの言葉とか、「人種・民族多元論」とか呼ばれているが、これが、現在のアメリカ人の社会である。(15)

「人種のるつぼ」はイズレイル・サングウィル (Israel Zangwill, 1864-1926)の戯曲 *The Melting Pot* (1908)がその命名のもとになっていると言われている。

*The Melting Pot* (1908)の第1幕では David Quixano (デヴィッド・キサーノ) が次のような台詞を述べるが、それが「人種のるつぼ」について触れる最初の箇所である。



Not understand that America is God's Crucible, the great Melting-Pot where all the races of Europe are melting and re-forming! Here you stand, good folk, think I, when I see them at Ellis Island, here you stand.

[Graphically illustrating it on the table]

In you fifty groups, with your fifty languages and histories, and your fifty blood hatred and rivalries. But you won't be long like that, brothers, for these are the fires of God you've come to—these are the fire of God. A fig for your feuds and vendettas! Germans and Frenchmen, Irishmen, and Englishmen, Jews and

Russians—into the Crucible with you all! God is making the American. (17)

アメリカ人とはヨーロッパ人を“melting and reforming”した新しい人種ということになる。このあたりが「人種のるつぼ」の根本的な考え方ということになるだろうか。

Safi Mahmond Mahfouz “America’s Melting Pot or the Salad Bowl: The Stage Immigrant’s Dilemma” (2013)では次のように説明されている。

Twentieth-century ethnicity theory has focused on questions of immigration and cultural assimilation of diverse ethnic minorities into the American society. The desire for recognition through assimilation is common to all immigrant minorities. The extensive theatrical production of Israel Zangwill’s famous play *The Melting Plot* (1908), a play emphasizing amalgamation of races in the American popular culture, popularized theories of ethnic assimilation into American mainstream culture and history. However, for many sociologists and literary critics the melting pot theory of American culture is no longer accepted as a way of understanding ethnic minorities in the United States (Cho 5). (18)

(Cho 5)とは Nancy Cho. *Staging Ethnicity in Contemporary American Drama*. (Diss. University of Michigan, USA, 1995)のことである。

村井忠政「メルティングポットの誕生—メルティング論の系譜(1) —」(2004)には次のように取り上げられている。

メルティングポットという言葉を最初に世に広めたのは、イギリスのユダヤ人劇作家イズリアル・ザングウィルの戯曲『メルティングポット』である。この作品でザングウィルは、様々の異なる民族が一つに溶け合って新しい民族、すなわちアメリカ人に生まれ変わる様を力強い筆致で描写している。『メルティングポット』は1908年にワシントンで初演され、その後シカゴで6ヵ月間のロングランを果たし、ニューヨークではなんと136回も公演されている。1909年に出版された4幕からなるこの戯曲は、皮肉なことに作者であるザングウィルの母国イギリスでよりはアメリカで人気を博し、多くの著名人の喝采を浴びた。<sup>(19)</sup>

村井は結論で次のように提言している。

メルティングポットが与えるイメージのうちの最も強いインパクトは「溶ける」という点にあるといえる。しかし、同じく溶けるといっても、その内容は具体的に何を意味するのか、必ずしも明確ではない。すなわち、アメリカに移民として渡ってきた人種・民族集団が、相互に婚姻を繰り返す（すなわち交婚する）ことによって「生物学的に」溶け合う（すなわち混血する）のか、それとも多様な異なった文化が相互に融合することで「新しい文化」に変容するのか。またすべての要素が対等に融合するのか、それとも主成分となるべきものがあるのか。<sup>(20)</sup>

「サラダボウル理論」についてはインターネット上の“Respectfully Quoted: A Dictionary of Quotations. 1989”で“Carl N. Degler., salad bowl”を複数検索すると、次のよう記述が出てくる。

AUTHOR	Carl Degler (1921-)
QUOTATION	The metaphor of the melting pot is unfortunate and misleading. A more accurate analogy would be a salad bowl, for, though the salad is an entity, the lettuce can still be distinguished from the chicory, the tomatoes from the cabbage.
CONTRIBUTION	CARL N. DEGLER, <i>Out of Our Past: The Forces That Shaped Modern America</i> , rev. ed., chapter 10, section 4, p. 296 (1970).
SUBJECT	America <sup>(21)</sup>

*Out of Our Past: The Forces That Shaped Modern America* の初版は1959年である。邦題として『現代アメリカを形成する諸要素』となろうか。

綾部恒雄「アメリカ文化とエスニックス」(綾部恒雄編『アメリカの民族—ルツボからサラダボウル』1992)では「同化論」「融和論」「文化的多元主義」について次のように述べている。

#### 同化論 (assimilation theory)

独立した当時のアメリカで主流をなしていた思想は、アメリカ合衆国覇建国の当初からアングロサクソンの要素が一貫して強く、文化的主流をなしていたという考え方である。こうした立場に立つ人びとは、アメリカはたしかに多くの移民を絶えず受け入れてきたが、ワスプの文化の主流は決して変化しなかったと考える。というのも、ワスプ(WASP, White Anglo-Saxon Protestant 人種的には白人で、民族的にはアングロサクソンでプロテスタントの人びとをさす)は他の移民がやってきたことには、すでにすでに地盤を固め、しかも多数派であ

ったし、どの時代をとっても、移民の割合は全人口のわずかな部分にすぎなかったからである。<sup>(22)</sup>

同化とは先住者のアングロへ一致させることという意味である。

### 融和論 (amalgamation theory)

しかし、移民の数がますます増えてきた 18 世紀も後半に入ると、新しいアメリカのあり方について、より理想主義的な考え方が現れるようになってきた。ヨーロッパからの移民はそれぞれ「最良」の伝統は生かしながら平等な立場で融和した国家としてアメリカは統一されていくべきだという思想である。いわゆる「メルティング・ポット論」(るつぽ論)のはじまりである。煮えたぎる「るつぽ」のなかに、次々と異なる金属片が投入され、それらはすべてが融けあって全く別の新しい金属が生まれることにたとえたわけである。ここでは「るつぽ」はアメリカ合衆国であり、投げ込まれる金属片は各種の移民である。

こうした「るつぽ」という言葉が広く用いられるようになったのは、ユダヤ人の作家イスラエル・ザングビルが、ユダヤ人の男とキリスト教徒の女性との結婚をたたえる劇『ザ・メルティング・ポット』(1909)を出版し、火つとしてからだといわれる。<sup>(23)</sup>

### 文化的多元主義 (cultural pluralism)

しかし、現実のアメリカ社会の動きをみると、アングロサクソンを中心とした優越的な旧移民は、新移民の混入を拒んでおり、他方、新移民の側でも、それまでの彼らの生活様式に固執する傾向が強かった。アメリカへ移住するすべての民族集団の融和を夢みてきた「アメリカ人」が、20 世紀も後半に入って、現実のアメリカの姿として発見したものは、民族、宗教、人種、地域性についての限りない多様性だったのである。融和的状况は確かに存在するが、現実はそれほど単純では

ないことがわかってきた。

こうした状況のなかで、いわゆる文化的多元主義とよばれる思想が芽生えてくるのである。文化的多元主義は、ほぼ 1914-16 年から 1960 年までの第 1 期と、1960 年以降の第 2 期とに分けて考えることができる。<sup>(24)</sup>

さらに次のように述べている。

文化的多元主義をもっとも雄弁に説いたのは、ハーヴァード大学出身の哲学者でユダヤ人のホレス・キャレンである。彼は 1915 年の『ネーション』誌に「民主主義とるつぼ」という論文を寄稿し、このなかでアメリカにおける各種の民族集団をオーケストラにおける諸楽器にたとえている。オーケストラでは、それぞれの楽器が異なった持ち味を出すことによって美しいシンフォニーが奏でられるように、各民族集団による多様な伝統文化が相調和することによって、アメリカ文明はより豊かになるというのである。しかし、キャレンのいう文化的多元主義は、ヨーロッパ文明の申し子としての白人のアメリカ文明を意味しており、アフリカン・アメリカンやヒスパニックやアジア系の諸民族をも視野に含んだものではないところに限界があった。

ところが 20 世紀も後半に入ると、文化的多元主義は第 2 次大戦後に世界的に広まった平等主義の浸透と少数民族の市民運動の展開の中で、アメリカ社会の現実をよりの確にふまえた形での発展を遂げるようになる。(第 2 期) とくに 1960 年代に急激に盛り上がったアフリカン・アメリカンによる一連の市民権獲得運動は、アメリカの文化的多元主義を強力に推進する起動力となった。南北戦争による奴隷制の廃止から 100 年近く待ちつづけてきたアフリカ系の人びとにおける「ブラック・パワー」の台頭がこれである。こうしたアフリカ系による運動の成果に刺激され、「イエロー・パワー」(アジア系)、「ブラウン・パ



ワー」(メキシコ系)、「レッド・パワー」(インディアン系)などが次々と台頭し、さらにこうした動きはホワイト・エスニックと呼ばれるフランス系、イタリア系、アイルランド系、ポーランド系など白人の民族集団へも広がりを見せるようになってきた。このような新しい文化的多元主義は、先の「オーケストラ論」と並んで「サラダボウル論」ともよばれる。<sup>(25)</sup>

同じく村井忠政「メルティングポットの誕生—メルティング論の系譜(1) —」(2004)を見ておきたい。

フロンティアの雰囲気色が濃く残っていたウィスコンシン州で育った若き歴史学者フレデリック・ジャクソン・ターナーは、このような一元論的な歴史の見方に満足できなかった。ターナーは1893年、アメリカの学問史上もっとも大きな影響力をもった論文の一つとされる「アメリカ史におけるフロンティアの意義」をアメリカ歴史学会に提出した。この論文でターナーが説いた「フロンティア理論」の論旨は、およそ次のようなものであった。

- (1) アメリカ史の真の見方は大西洋岸を中心としたものではなくて大西部にあること。
- (2) 自由地が西方に存在し、それが絶えず後退し、アメリカ開拓が西進することが、アメリカの発展を説明すること。
- (3) 絶えず後退するフロンティアが慣習の絆を断ち切って、新しい経験を提供し、新しい制度や活動を喚び起こすこと。
- (4) フロンティアは民主主義、国民主義、孤立主義、個人主義、文化追求への無関心、広く言って、アメリカ人の国民性と強い関係があること。
- (5) フロンティアは東部に対して「安全弁」の役を果たしたこと。  
ターナーは上に見たような「フロンティア理論」に基づいて、フロ

ンティアが 垣塙の働きをすることでアメリカ人という「複合的な国民性」(a composite nationality) の形成を促したとする仮説を提示したのである。(26)

石井敏・久米昭元編集代表『異文化コミュニケーション事典』(2013)の太田浩二「人種のるつぼ説」では次のような説明がある。

「人種のるつぼ説」は、サラダボール説やモザイク説以前に主流であった、異民族の同化を前提とした文化構成を唱えた説である。この説によると、るつぼの中で溶け合い混じり合う物質のように、異なる民族集団はその独特な文化を返上することにより互いに融合し、社会全体としては文化的に画一化された1つの社会集団へと収斂する。その結果、各民族集団の成員は、元来もっていた固有の民族文化に基づくアイデンティティではなく、新しく生成された共通の文化に由来するアイデンティティを中心に自らを定義することを余儀なくされる。(27)

飯島真里子「第 14 章 アメリカへの移民—国民国家による排除と包摂はアメリカの多様性についてでは次ぎのように述べている。

建国当初から多様性を内包していたアメリカでは、「どのように社会を統一するか」ということも長らく議論の対象だった。

25 セント硬貨にも刻まれているように「多様性の中の統一 (E Pluribus Unum) がアメリカのモットーである。国家は人種、民族、宗教など異なった背景を持つ人々による「アメリカ人」アイデンティティの獲得を理想として掲げてきた。しかし、植民地建設時からアメリカでは、ワスプが中心的となり、多様性の中に差別構造を作り出し、白人優位性の維持に力を注いできた。公民権運動の台頭までは、ヨー

ロッパ系移民集団内の多様性のみが注目され、その融合が試みられた。その際、異なる移民の文化が溶け合い「アメリカ人」となっていく「メルティング・ポット（つるぼ）」論が展開された。ここでのアメリカ人は、血統的、生物学的なカテゴリーではなく、文化風習、言語、価値観など文化的、社会的適応度を基準としたカテゴリーだった。これは、新移民のワスポ化を意味し、先住民、黒人、アジア系移民などの非白人は対象外だった。

それに対し、それぞれの移民・民族集団が多様性を保持しながら、アメリカ社会を形成しているという考えも早くから存在していた。哲学者ホレス・カレンは1915年「文化多元主義（Cultural Pluralism）」を提唱し、多様な文化をオーケストラの楽器になぞらえ、アメリカ車か野シンフォニーを創り出す重要な構成要素だと主張した。しかし、アメリカ政府の法規制が示すように、このような認識が国家、社会内で反映されるのは戦後になってからである。

1952年移民国籍法では、アジア系移民の帰化申請権が認められ、わずかだが移民の入国も許可された。1960年代の公民権運動とアイルランド系移民三世のケネディ大統領の就任は、移民に関する法改革に拍車をかけた。1964年市民権法では、人種、肌の色、民族的出自、宗教などの特定の属性によるアメリカ国民の差別を禁じた。また、1965年移民法改正は出身別国割当制を撤廃し、年間移民受入総数を29万人に設定した。ヨーロッパ、アジア、アフリカから17万人、南北アメリカ大陸から12万人と定め、地域別の受入制限は以前残っていたが、アジア系移民に大きく門戸を開いた。

同移民法は、移民の国アメリカの象徴自由の女神像のもと、ジョンソン大統領によって署名され、アメリカは新たなる移民国家の形成へと向かった。1965年以降、アジア、ラテンアメリカからの移民は急増し、社会内の多様性は進行していった。現在、このような社会を「サラダボール」や「モザイク」と表現することも多い。<sup>(28)</sup>

インターネット上にある「25 セント硬貨」の説明を紹介しておきたい。

### 「アメリカ・ザ・ビューティフル」25 セント硬貨プログラム

2010年に始まったこのプログラムでは、アメリカ50州、ワシントンD.C.ならびに5つの準州のそれぞれにある国立公園や歴史的に意義のある景勝地のデザインを裏面に施した56種類の25セント硬貨を、2021年まで12年かけて発行する。



United States Mint image

#### 【硬貨に刻印されている文字】

硬貨には UNITED STATES OF AMERICA と QUARTER DOLLAR の他に、次の文字が刻印されている。

**E PLURIBUS UNUM**：ラテン語で「多数から1つへ」を意味し、アメリカが多数の州で構成されていることを表している。

**IN GOD WE TRUST**：1782年に議会で制定された公式標語で、「神を信じる」という意味。

「D」はデンバー、「S」はサンフランシスコ、「P」はフィラデルフィアの造幣局で製造されたものである。<sup>(29)</sup>

アメリカの人種の問題はこれだけではない。「イギリス系プロテスタントの先住民」とあるが、アメリカにはそもそもネイティブアメリカン（当初はアメリカ・インディアンと呼ばれていた）がおり、西部開拓と共に争いが絶えない歴史があった。

飯島真里子「第 14 章 アメリカへの移民—国民国家による排除と包摂」(2013)では先住民については次のように述べている。

先住民も、黒人同様、強制移動させられた人々だった。たとえば、チェロキー族は白人との友好関係の維持に積極的な「文明化五部族」とされたが、ジャクソン大統領のインディアン移住法調印（1830 年）により、東部の先住民の土地とミシシッピ川以西の土地の交換が取り決められた。部族からの激しい抗議にもかかわらず、1838 年、チェロキー族 1 万 5 千人は、徒歩による移動を強いられた。移動中の犠牲者は 4 分の 1 以上にのぼり、チェロキー族はこの悲劇的な道のを「我が泣いた道（Trail of Tears）と呼んだ。

また、1974 年のアメリカ先住民事業法の成立により「ネイティブ・アメリカン」となったハワイ先住民も、欧米からの白人の流入により大きな変化を強いられた。<sup>(30)</sup>

さらに黒人の問題もある。黒人についても荒このみ監修『[新版] アメリカを知る事典』(2012)の荒木圭子「黒人」では次のように説明している。

<黒人>の呼称については、19 世紀末から 20 世紀半ばまでは、おもに<カラード Colored>や<ニグロ Negro>が白人と黒人の双方によって使用されていた。しかし公民権運動を経て 1970 年代に入ると、これらの言葉は黒人への否定的イメージを含んでいるとして黒人の間で敬遠されるようになり、代わって、より肯定的に自らを示す用語として<ブラック Black>や<アフロ・アメリカン Afro-American

>、さらに<アフリカン・アメリカン African American>が使用されるようになった。現在、一般的にアフリカン・アメリカンが<政治的に正しい>言葉とされているが、奴隷制時代にルーツを求めるニュアンスが含まれていることから、奴隷制廃止後に移住してきたカリブ海やアフリカ出身者には厳密には適用できない、とする見方もある。オバマが大統領選に出馬した際、その<黒人性>が一部で問題になったのは、このためである。なお、現在でも年配者のなかには<ニグロ>を使う者がみられることから、人口センサスでは、<ブラック、アフリカン・アメリカンまたはニグロ>と規定されている。<sup>(31)</sup>

黒人について飯島真里子「第 14 章 アメリカへの移民—国民国家による排除と包摂」ではアフリカからの移民として次のように述べている。

通常、アフリカ系移民は奴隷という背景から、アメリカでは「移民」として研究されることは少ない。しかし、ディアスポラ研究者コーエンが「不本意な移民 (Involuntary Immigrants)」と分類したように、その移動の重要性は無視できない。17 世紀の北米植民地建設は、ヨーロッパ、アフリカ、アメリカの三大陸を結ぶ大西洋政界における労働力人口移動を生み出し、西アフリカからの奴隷はアフリカ—アメリカ間航路の重要な「商品」であった。17 世紀から 1860 年代までアメリカへ送られた奴隷数は 645 万人と推定される。

1641 年にマサチューセッツ湾植民地が奴隷制を合法化すると、主な労働力は白人年季奉公人から奴隷へと移行し、18 世紀中盤までに 13 植民地で奴隷制が認められた。1655 年、ノーサンプトン郡裁判所は、主人からの解放を求めたジョン・ケイサーに対し「黒人(Negro)」であることを理由に「生涯奴隷」の判決を下し、これにより、奴隷が人種的に定義され、白人との境界が明確化した。奴隷制が公式に廃止されるのは、南北戦争後の 1865 年憲法修正第 13 条批准によるが、財産も

仕事もなかった黒人は、解放後も元農園主のもとで分作小作人として働き、白人への奴隷状態が長らく続いた。<sup>(32)</sup>

中村美子「アメリカ人とは何か」(1982)では次のようにまとめられている。

黒人は自らの指導者のもとに結集し、人種差別撤廃運動に立ち上がった。その過程において、黒人はアフリカ出身のアメリカ人として、アメリカ合衆国建設に大いに貢献してきたことを語り、黒人であることの誇りを、「ブラック イズ ビューティフル」のスローガンと共に、世に示した。今世紀から都市のスラムに集中する貧しい黒人が、暴動に起こしたり、黒人指導者と、支援する白人との間に対立が生じたりしながらも、1964年・65年に、あらゆる人種差別を禁じ、投票権を保障する公民権法が成立した。<sup>(33)</sup>

佐伯彰一編『アメリカハンドブック』(1986)の宮本倫好「人種—エスニック・アメリカ」では次のような説明がある。

しかし今や、各エスニック・グループがアメリカン人としての統一は保ちながらも、それぞれの多様性を容認し合うことが、アメリカのあるべき姿であるとする文化的多元主義が、社会の主流になった。すなわち、かつての「るつぽ」に対して、アメリカ社会はそれぞれの野菜がまざり合いながら、しかし決して単一のものではないという意味で、「サラダ・ボウル」あるいは七色の異なった色から成る「虹」と呼ぶ呼び方が定着しはじめている。<sup>(34)</sup>

最後にインターネット上のAse Elin Langeland“Melting Pot and Salad Bowl”(updated:03030.2017)を紹介しておきたい。

## The Melting Pot

### Immigrants

The great numbers of immigrants arriving in the United States forced the new nation to implement a policy of nation building. How should the immigrants be incorporated into the new nation? How should they become Americans? Thus one of the most persistent rhetorical questions in the course of American history has been: "What is an American?" And perhaps the most famous answer to that question was given by Crèvecoeur, a Frenchman, in 1783: "*Here individuals of all races are melted into a new race of men*". More than a century later these same ideas were expressed in the myth of "the melting pot." The term was coined by Israel Zangwill in his famous play *The Melting Pot* (1908). Zangwill illustrated how people from different nations were melted together and born again as Americans. The melting pot became the image of an assimilated American society. The immigrants had been transformed into Americans. <sup>(35)</sup>

### The Salad Bowl

The term complementary identity is frequently used to characterize the immigrant possessing both an ethnic identity and a national identity as an American citizen. To explain this double identity we often use "salad bowl" as a metaphor. In the "salad bowl" metaphor each culture retains its own distinct qualities (the different ingredients in the salad), but has a sense of common national identity in the country of habitat (the salad). We also use the term hyphenated to illustrate the double identity e.g. a



Norwegian American is a hyphenated American. <sup>(36)</sup>

現在は文化多元主義のこの「サラダボウル理論」が主流である。ちなみに「パッチワーク」「モザイク」という表現もあるが、サラダボウルは同じ器に入っていることが想定されるが、パッチワーク、モザイクはそもそも枠組み自体が異なる。

## 6 文化多元主義への入り口としてのサラダボウル論

「サラダボウル(論)」は国際理解という大きな枠組みとして考えると、異文化理解に直結することになる。画一化を目指すグローバリゼーションを押し進めてきたアメリカ国内の状況は多文化主義に溢れている。アメリカは建国以来、移民の国であるが、この移民政策の辿りつくところは一体何処なのか。移民政策を巡ってはアメリカ大統領選挙でも争点となり、最終的にドナルド・トランプ (Donald Trump, b.1946)が当選し、現在に到っている。イギリスでは移民政策とこれに伴う EU 離脱をスローガンに掲げたテリーザ・メアリー・メイ (Theresa Mary May, b.1956) が当選し、現在政権を担っている。

人種の問題は国籍とは関係のないところにある。「人種」は新村出編『広辞苑』(2018、第7版)によれば以下の通りである。

(race) 人間の皮膚の色を始め頭髪・身長・頭の形・血液型などの形質的な特徴による区分単位。最も一般的な分類は、コーカソイド(白色人種)・モンゴロイド(黄色人種)・ネグロイド(黒色人種)の三つに大別するもの。オーストラロイドを加えることもある。今日では人類を形質的な基準で分類することはできないとの批判があり、遺伝する特性を共有すると考えられる集団を指すことが多い。<sup>(37)</sup>

高等学校では敬遠されている「民族」という表現について、同じように新村出編『広辞苑』（2018、第7版）によれば以下の通りである。

文化や出自を共有することからくる親近感を核にして歴史的に形成された、共通の帰属意識をもつ人々の集団。特に言語を共有することが重視され、宗教や生業形態が民族的な伝統となることも多い。国民国家の成立によって、明確な境界をもち、固定的なものとなされたが、もともとは重複や変更が可能で、一定の地域内に住むとは限らず、複数の民族が共存する社会も多い。また、人種・国民の範囲とも必ずしも一致しない。<sup>(38)</sup>

現在では教科書では「〇〇民族」ではなく、「〇〇人」と表現している。アメリカの国名は英語表記では **United States of America** であるが、ここには単に「州を合わせた」という意味に過ぎない。アメリカ人と単に表現される以上に〇〇系アメリカン人という表現はよく耳にするところだ。移民の国独特の表現とも言える。「アメリカ人とは何か」という問いは実はかなり奥深いということになる。こうした内容は「地理 B」「世界史 B」で取り上げるよりは、「総合的な学習の時間」の中で、主体的な取り組みや議論を繰り返しながら、考えていくことが有効かもしれない。それは文化多元主義を理解することが国際理解につながるからである。

## 7 「総合的な学習の時間」としての取り組み

アメリカ文化の根底にある「多元的文化主義」を高等学校の教科としては、世界史 B では「人種のるつぼ」「サラダボウル論」共に扱われていないが、地理 B では取り上げられている。人種、民族問題は「政治経済」でも取り上げられている。アメリカ大統領選挙においても大きく影響するこの人種の問題はアメリカを理解する上では不可欠なものである。

選挙権も引き下げられ、18歳から投票権を得ることになり、高校生が政治に参加することになる。オバマ大統領、トランプ大統領の大統領選を考えるにはこうした人種の背景を無視して考えることはできない。日米安全保障の観点からもアメリカの動向は日本にとって大きな影響を与えることになる。安全面だけではなく、経済面でも無視できるものではない。地理 B、世界史 B の範囲で捉えることができないとすれば、それはまさに探求的、総合的な考察が必要である。しかも単なる史実を学ぶのではなく、現在進行しているアメリカの背景を学ぶことにもなる。また、アメリカ文化を端的に表現するキーワードがイギリス演劇の作品であったことも興味深いところだ。すなわち、アメリカ文化の根底を表現したのはイギリス人であったということだ。もう少し正確に言えば、ユダヤ系のイギリス人である。

また、紙幣や硬貨にはその国や文化人や政治家、その国の成立に深く関わった人物やその国を象徴する建造物や自然物が描かれることがある。また、標語の場合もあるかもしれない。その意味ではアメリカの 25 セント硬貨からアメリカの文化多元主義に発展させることはごく自然なことだ。いまや文化多元主義は異文化コミュニケーションにおける「容認」として重要になっている。異なるものを「容認」し、そこから「理解」につなげる。共存は理想的には「相互理解」の上で成立することが望ましいが、現実的には共存には「容認」「寛容」なければ、共存自体が成立しない。理解はその次の段階となる。まず、他者は異なるものであることを認める必要がある。

## エピローグ

高等学校で教科書「地理 B」に記載されている「人種のるつぼ」と「サラダボウル（論）」を大学の授業で扱う際、アメリカ文化の根底、言い換えれば、アメリカという国の根本にまで触れることになる。移民の国の

成り立ちに触れることになるからだ。単にピリグリム・ファーザーズが1620年にニューイングランドに上陸し、その後、移民がアメリカに殺到し、やがてアフリカから黒人が奴隷としてアメリカへ連れてこられた。アメリカは本当に「多数から1つへ」になったのだろうか。ここに「人種のるつぼ」の疑問が生まれている。そこへ新たに登場したのが「サラダボウル（論）」である。「人種のるつぼ」とは違い、溶け合わないため「サラダボウル」という考え方が登場した。何故、溶け合わないのかはまさに大学で取り上げられる内容ではないだろうか。今や「人種のるつぼ」はブラジルを指す用語としても使用している教科書もある。時代と共に用語の取り扱いが変わるのである。教授者としては中学校・高等学校の教科書の内容を知り、学生の学習歴を知ることは、大学での講義での内容や進め方のよい点検となる。

## 注

- (1) 『中学校学習指導要領解説 社会編』（2014年1月一部改正）、p.10.  
([http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2014/10/01/1234912\\_003.pdf#search=%27E3%80%8E%E4%B8%AD%E5%AD%A6%E6%A0%A1%E5%AD%A6%E7%BF%92%E6%8C%87%E5%B0%8E%E8%A6%81%E9%A0%98%E8%A7%A3%E8%AA%AC+%E7%A4%BE%E4%BC%9A%E7%B7%A8%E3%80%8F%EF%BC%882014%E5%B9%B41%E6%9C%88%E4%B8%80%E9%83%A8%E6%94%B9%E6%AD%A3%EF%BC%89%27](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2014/10/01/1234912_003.pdf#search=%27E3%80%8E%E4%B8%AD%E5%AD%A6%E6%A0%A1%E5%AD%A6%E7%BF%92%E6%8C%87%E5%B0%8E%E8%A6%81%E9%A0%98%E8%A7%A3%E8%AA%AC+%E7%A4%BE%E4%BC%9A%E7%B7%A8%E3%80%8F%EF%BC%882014%E5%B9%B41%E6%9C%88%E4%B8%80%E9%83%A8%E6%94%B9%E6%AD%A3%EF%BC%89%27))(2018年3月12日アクセス)
- (2) Ditto.
- (3) Ibid., p.18.
- (4) 『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』（2014年1月一部改正）、p.99.

([http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2014/10/01/1282000\\_3.pdf#search=%27%E3%80%8E%E9%AB%98%E7%AD%89%E5%AD%A6%E6%A0%A1%E5%AD%A6%E7%BF%92%E6%8C%87%E5%B0%8E%E8%A6%81%E9%A0%98%E8%A7%A3%E8%AA%AC+%E5%9C%B0%E7%90%86%E6%AD%B4%E5%8F%B2%E7%B7%A8%E3%80%8F%EF%BC%882014%E5%B9%B41%E6%9C%88%E4%B8%80%E9%83%A8%E6%94%B9%E6%AD%A3%EF%BC%89%27](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2014/10/01/1282000_3.pdf#search=%27%E3%80%8E%E9%AB%98%E7%AD%89%E5%AD%A6%E6%A0%A1%E5%AD%A6%E7%BF%92%E6%8C%87%E5%B0%8E%E8%A6%81%E9%A0%98%E8%A7%A3%E8%AA%AC+%E5%9C%B0%E7%90%86%E6%AD%B4%E5%8F%B2%E7%B7%A8%E3%80%8F%EF%BC%882014%E5%B9%B41%E6%9C%88%E4%B8%80%E9%83%A8%E6%94%B9%E6%AD%A3%EF%BC%89%27)) (2018年3月12日アクセス)

- (5) 川畑勝編『ハンドブック地理の要点整理』(学研教育出版、2013年7月)、p.225.
- (6) 地理用語研究会編『地理用語集 A・B 共用』(山川出版、2014年10月)、p.164
- (7) Ibid., p.164.
- (8) 丹野直「現代音楽」(松尾弑之・大西建夫編『アメリカの社会 多様性の中に統一を求めて』早稲田大学出版部、1994年3月)、p.161.
- (9) 中村美子「アメリカ人とは何か」(中屋健一編『アメリカ入門 12講』三省堂、1982年12月)、p.2.
- (10) 飯島真里子「第14章 アメリカへの移民—国民国家による排除と包摂」(杉田米行編『アメリカを知るための18章』2013)、p.150.
- (11) 池田智「地域」(日本アメリカ文学・文化研究所編『アメリカ文化ガイド』荒地出版社、2000年6月)、p.19.
- (12) 阿部珠理「アメリカ先住民族の呼称について」(<http://www.aritearu.com/Influence/Native/Indian.htm>)(2018年2月8日アクセス)
- (13) 宮本倫好「人種—エスニック・アメリカ」(佐伯彰一編『アメリカハンドブック』)、p.163.
- (14) 「WASP」(日本アメリカ文学・文化研究所編『アメリカ文化ガイ

- ド』)、p.364.
- (15) 中村美子 「「アメリカ人とは何か」、pp.16-17.
- (16) 「図版」  
([https://en.wikipedia.org/wiki/The\\_Melting\\_Pot\\_\(play\)](https://en.wikipedia.org/wiki/The_Melting_Pot_(play)))(2018年2月11日アクセス)
- (17) Israel Zangwill. *The Melting-Pot*. (Poland: Amazon Fulfillment, 2015), p.19.  
\*2015 by McAllister Editions.
- (18) Safi Mahmond Mahfouz “America’s Melting Pot or the Salad Bowl: The Stage Immigrant’s Dilemma” (*Journal of Foreign Languages, Cultures & Civilizations*, Vol.1 No.2, American Research Institute for Policy Development, December, 2013)  
([http://jflcc.com/journals/jflcc/Vol\\_1\\_No\\_2\\_December\\_2013/1.pdf#search=%27Safi+Mahmond+Mahfouz%E2%80%9CAmerica%E2%80%99s+Melting+Pot+or+the+Salad+Bowl%3A%27](http://jflcc.com/journals/jflcc/Vol_1_No_2_December_2013/1.pdf#search=%27Safi+Mahmond+Mahfouz%E2%80%9CAmerica%E2%80%99s+Melting+Pot+or+the+Salad+Bowl%3A%27)) (2018年2月12日アクセス)
- (19) 村井忠政「メルティングポットの誕生—メルティング論の系譜(1)—」(『人間文化研究』第2号、名古屋市立大学大学院人間文化研究科、2004年1月)、p.23.
- (20) Ibid., pp.26-27.
- (21) “Respectfully Quoted: A Dictionary of Quotations. 1989”で “Carl N. Degler., salad bowl” (<http://www.bartleby.com/73/49.html>)(2018年3月1日アクセス)
- (22) 綾部恒雄「アメリカ文化とエスニックス」(綾部恒雄編『アメリカの民族—ルーツボからサラダボウル』弘文堂、1992年2月)、pp.6-7.
- (23) Ibid., p.8.
- (24) Ibid., p.9.
- (25) Ibid., pp.10-11.

- (26) 村井忠政「メルティングポットの誕生—メルティング論の系譜(1) —」、pp.21-22.
- (27) 太田浩二「人種をつるぼ説」(石井敏・久米昭元編集代表『異文化コミュニケーション事典』(春風社、2013年1月)、p.514.
- (28) 飯島真里子「第14章 アメリカへの移民—国民国家による排除と包摂」、pp.152-153.
- (29) 『『アメリカ・ザ・ビューティフル』25セント硬貨プログラム』(<https://amview.japan.usembassy.gov/quarters-programs/>)(2018年2月8日アクセス)
- (30) 飯島真里子「第14章 アメリカへの移民—国民国家による排除と包摂」、pp.148-149.
- (31) 荒木圭子「黒人」(荒このみ監修『[新版] アメリカを知る事典』平凡社、2012年4月)、p.217.
- (32) 飯島真里子「第14章 アメリカへの移民—国民国家による排除と包摂」、p.147.
- (33) 中村美子「『アメリカ人とは何か』」、p.7.
- (34) 宮本倫好「人種—エスニック・アメリカ」、p.164.
- (35) Ase Elin Langeland “Melting Pot and Salad Bowl” (updated: 03030.2017)(<https://ndla.no/en/node/15153?fag=42>)(2018年2月12日アクセス)
- (36) Ditto
- (37) 新村出編『『広辞苑』(岩波書店、2018年1月、第7版)に対応したロゴヴィスタ DVD-ROM より(頁表記なし)
- (38) Ditto.

※中学校・高等学校の教科書の調査には早稲田大学教育学部教育教員図書室を利用した。

執筆者一覧

佐々木 隆 武蔵野学院大学教授

新教育課程研究 第4号

2018年6月15日 発行

武蔵野教育研究会 編集・発行

〒350-1328

埼玉県狭山市広瀬台3丁目26番1号

武蔵野教育研究会事務局

武蔵野学院大学 佐々木隆研究室